

## 【主催・協賛・後援会議参加報告】



## 主催・協賛・後援会議参加報告

## ◆「VR セミナー 99」実施報告

### 「実用化を迎えたVR技術～人にやさしいVRが社会に果たす役割～」

苗村健

東京大学

(News letter Vol. 4, No. 5)

1999年5月19日

東京大学工学部14号館5階大セミナー室

申込者数：29名（参加者25名）（内訳：株式会社8名、公的機関11名、学生9名、不明1名）

VRは人を驚かすだけの技術ではなく、人にやさしい技術でもある。今回のセミナーでは、福祉関係を中心に4人の講師の方を迎え、実用の観点から見たVR技術の最新動向についてご講演頂いた。ビデオやパソコンを駆使した分かり易い説明により、講演後の質疑も充実したものになった。

猪木誠二氏（郵政省・通総研）は、郵便局窓口における聴覚障害者と局員のコミュニケーションを題材とした手話生成・認識システムについて講演された。聴覚障害者にとって、手の動きとしての手話だけでなく、表情の重要性について強調されていたのが印象的であった。また、手話そのものの研究（これは工学の範疇ではない）の遅れが、システム開発を進める上で問題となっており、様々な機関・分野との連携が重要であると締め括られた。

井上剛伸氏（国立リハビリテーションセンター）はVR技術を用いた電動車椅子のシミュレータを例に、障害者に対する支援のあり方について、その難しさと可能性を話された。「自らの意思で移動できるようになること」は、単に物理的な移動が可能になるというだけでなく、障害者にとって精神的な成長を促し、障害を克服していく上で重要な役割を果たしている。電動車椅子に乗ることができない重度の障害者にとっては、VR技術を駆使した電

動車椅子シミュレータが新しい役割を担い得るものと感じられた。また、障害に応じ工夫を凝らして開発されたインタフェース技術にも目を見張るものがあった。

板生清先生（東大）は、モバイル通信の先を行くセンサ通信の概念について話された。ネイチャーインタフェースをキーワードとして、人工物の世界と自然界を微小なデバイス（センサ）で結び付けていく大きな構想の中で、近年話題を集めているウェアラブルコンピューティングが位置付けられていた。生体を対象としたアナログ信号入力を微小なセンサで感知し、伝送するというプロセスの中で、現在主流となったデジタル技術がどのように組み込まれていくのかに興味を持たれた。

二瓶健次先生（国立小児病院）はポケモン事件の分析をもとに、テレビ映像刺激の危険性について警鐘を鳴らされた。様々な症例が報告され、問題を引き起こし易い視覚刺激の例が実際にビデオで紹介された。幸い、会場で気分を悪くする方はおられなかったが、非常に刺激的な経験であった。

講演会に引き続き行われた見学会には半数以上の方が参加された。原島・苗村研（東大・工・電子情報）では各種多眼撮像システム、広精細広視野角実写ウォークスルー、インタラクティブな顔画像インタフェースなどが、板生研（東大・工・精密機械）では、ウェアラブル生体情報センシング、野生動物の位置探査システム、微小記憶デバイス、微小振動の解析などの研究が紹介された。